

雑感です

太田喜久子

お蔭様で定年を迎えることができ、これまでできなかったことをやってみようと思立ち、高齢者ケアの現場に週1回通わせてもらっている。

現場はリアリティーに溢れていて、それに圧倒される思いだ。

教育が長すぎた私は、こんなことを感じる、

『ぶつ切り』: 食べること、トイレのこと、口腔ケアのこと、休むこと、動くこと

あたかもひとつひとつが独立してあるように教えていないか。それが当たり前、あるいは仕方ない、になっていないか。

講義でひとつひとつ丁寧に、実習でつながる？そうだろうか。

ぶつ切りのように教えていたら、ぶつ切りがほんとに思えてきて、人をぶつ切りで見始める。

生活のひとコマひとコマは、互いに関連しながら、流れの中にあってその日その日を過ごしているということを、より実感を持ってはじめてから教育できないか。みんな、自分もそのように生きているのだから。

『失敗してもやり直すことができる』: 現場ではうまくいかなければごまかしようがない。高齢者への迷惑、家族からのクレームでわかってしまう。一度うまくいっても、いつもうまくいくとは限らない。

実習室だから、失敗してもまるでなかったようにもう一度やり直す。ほんとはそんなことはできない。とりかえしはつかないのだ。

しまった体験、それからどうするか。誠意を持って、どう建て直すかを学べないか。

『〇〇病の人を受け持つ』: 〇〇病の人、はいない。

毎週会っていると親しみが湧いてくる。Aさん、Bさん、今日の調子はどうかな。朝の挨拶でにこりと笑ってくれるかな。Aさんにはこんな病気や症状があるけど。

〇〇病の人を受け持たせてください、とためらいもなく実習生や教員が言ってきたら、ほんとに違和感いっぱいになるだろうな、そんな人はいませ

ん

と断ろうか。

はじめは高齢者による高齢者ケアを楽しもうと思っていたが、いまはそれどころではなく、そんな余裕はない。あたまとからだはバラバラで、体を動かすと考えていたことがどこかに飛んでいく、あれ？

現場では、同じ日は一日たりともない。高齢者、家族、スタッフ、いろいろな関係者、どこかで何かが起こっている。責任者はそれぞれの背景を考えながら使えるリソースを探って、いま、これからの対策を立てていく。このような現場のリアリティーってすごい、と実感している。

そして我がままな働き方を受け入れてくれている皆様に大感謝している。